

行田 歴史系譜 279

東海木曾両道中懐宝図鑑

当館所蔵

歴史を語るこの「いっぴん」
博物館の収蔵庫から

15

4月28日、「和装文化の足元を支え続ける足袋蔵のまち行田」のストーリーが日本遺産に認定されました。そこで今回は行田足袋の歴史に関する資料を紹介します。

行田でいつから足袋が作られていたかは、はっきりとは分かりません。享保年間（1716〜36）の行田町を描いた絵図には家数291軒の記載があり、そのうち3軒は足袋屋が確認できます。この軒数から考えると、足袋はまだ特産品ではなく、城下町や宿場内の需要を満たすにとどまっていたと推測されます。

しかし、これ以降行田の足袋は次第に生産量を伸ばしていききました。それを知る手掛りの一つが「東海木曾両道中懐宝図鑑」です。この資料は明和2年（1765）に江戸日本橋の須原屋茂兵衛が刊行した東海道と中山道のガイドブックです。上下2段に分かれており、上段は東海道を江戸から京都へ、下



東海木曾両道中懐宝図鑑

段は中山道を京都から江戸への順番で、それぞれの宿場の様子や沿道の風景を絵図で紹介しています。表題に懐宝とあるように、懐中に入れて携帯できるサイズで、見開き1ページに1つの宿場の見出しを立て、宿場間の距離や神社、旧跡、名物などが簡潔に記されています。

その中の熊谷宿から鴻巣宿にかけての記載の中に、「忍のさし足袋名産なり」と記されています。このことから行田の足袋が名産品としてすでに名が知られていたことが分かります。また、旅行ガイドブックに記された情報であることから、行田周辺で生産された足袋が中山道を行き交う旅人に供給されていたと思われるのです。その生産は行田町だけではなく、周辺の農村でも農間余業の内職として行われていました。

やがて、天保年間（1830〜44）になると行田町の足袋屋は27軒に増加しました。販路も江戸や東北地方までに広がり、後の足袋産業隆盛の基礎を築いていったのです。

（郷土博物館 鈴木紀三雄）

特定非営利活動法人 魅力創造倶楽部

特色と活力のある地域社会の創造を目標に掲げ、多様なスキルと情熱を持ったメンバーが集い、活動しているのが特定非営利活動法人魅力創造倶楽部です。同法人は、平成23年6月に18人で設立し、現在は25人が所属しています。

これまで、さまざまな地域の団体や、行田商工会議所、市などと一緒に地域を盛り上げようと、街コンやコスプレイベントをはじめとした各種催しを実施したり、市外のイベントにも積極的に参加したりと、いろいろな場面で「行田の魅力」を発信。また、いち早くインタビューボードを導入したり、忍城をモチーフにしたキャラクター「うきしろちゃん」を作製したりと、先進的な取り組みにもチャレンジしてきました。

「行田には周囲から羨望される素材がたくさんあるので、これらをつないで新たなチャンスを創る活動が私たちの役目だと思っています」と熱く語るメンバーの皆さん。これからも行田にたくさんのワクワクを生み出してくれることでしょう。

【代表理事】飯島 千裕 【電話番号】554-3238 (和歌稲)

つながる ひろがる みんなのチカラ

～市民公益活動団体紹介～⑥



さまざまな場面で活躍する「うきしろちゃん」

今月の表紙

4月28日、本市が文化庁に日本遺産認定の申請をしていたストーリー「和装文化の足元を支え続ける足袋蔵のまち行田」が県内で初めて日本遺産に認定されました。同日、この発表を受け郷土博物館では記念セレモニーが行われ認定を祝いました。今後、「足袋のまち行田」が一層脚光を浴びることが期待されます。（関連記事は2〜5ページ）

- 市報ぎょうだに掲載されているあなたの写真を差し上げます。ご希望の方は、広報広聴課広報広聴担当（内線318）まで。
- 市民の皆さんの市政に対するご意見をお待ちしています。
- 市報をダイジー版に録音したものを希望者宅にお届けします。ご希望の方は、広報広聴課広報広聴担当（内線318）までご連絡ください。



市報ぎょうだは 再生紙を 使用しています